

## <書評論文>

# プレカリアート —— 新しい危険な階級 ——

Guy Standing,  
*The Precariat: The New Dangerous Class*  
(Bloomsbury, 2011)

池 田 裕

## 1 はじめに

本稿は、イギリスのバース大学の教授であるガイ・スタンディングが2011年に発表した著作についての書評論文である。国際労働機関（ILO）の「社会経済保障プログラム」の責任者として活動した経済保障の専門家であり、ベーシック・インカム地球ネットワーク（BIEN）の創設者の一人でもあるスタンディングの手になる本書は、英語圏で初めて「プレカリアート」ということばを書名に掲げている。プレカリアートとは、不安定を意味する「プレカリアス」という形容詞と「プロレタリアート」を組み合わせた、多くの辞書にはまだ出ていない造語である。

ただし本書によると、プレカリアートはすでに1980年代には、非正規労働者や季節労働者を記述することばとしてフランスの社会学者によって用いられており、社会科学における最新の発明品というわけではない。またプレカリアートは、たしかにプロレタリアートと一定の関連があるものの、本書が強調するのはむしろ、プレカリアートと伝統的な労働者階級との断絶である。本書はプレカリアートの拡大の原因を、1975年から2008年までの「グローバル化の時代」における政策と制度の変化に求め、現実の分析から処方箋の提示へと積極的に踏み込んでいく。

プレカリアートをめぐっては、その過酷な労働の実態や、寄る辺のない多様な人びとを

プレカリアートの概念によって結びつける可能性が論じられるとともに、自律的な空間を開く彼らの芸術的でユーモアに富んだ路上のパフォーマンスが、社会運動論の文脈で語られてきた（渡邊 2012）。本書もプレカリアートの抵抗運動の嚆矢としてユーロメーデーを挙げ、その祝祭的な雰囲気と言及しつつ、戦略性や攻撃性よりむしろ笑いとユーモアがデモを特徴づけていることを指摘し、産業社会を否定する「1968 年」の若者にプレカリアートの起源を見いだしている。

本書の議論の多くは、流動化する労働市場の機制的分析に充てられている。本書が冒頭で要約するとおり、新自由主義を奉じる政府と企業によって労働市場の柔軟性が追求され、その代償としての不安定性が労働者とその家族に移転された結果が、グローバルなプレカリアートの出現なのである。また労働の意味を問いなおす必要を説く本書は、生産活動に特権的な地位を与える近代の労働主義に疑義を呈する。それゆえに本書の目的は、グローバル資本主義に対する批判であると同時に、経済成長と完全雇用を前提とした福祉国家に対する批判でもある。

## 2 本書の構成

第1章では、プレカリアートという階級の定義が試みられる。現代の階級構造の上部には、少数の裕福な「エリート」を頂点として、大企業や公的セクターに勤務する「サラリアート」や、専門家や技術者で構成される「プロフィション」が確認され、従来の労働運動の担い手であった肉体労働者がこれに続く。こうした集団の下位で拡大しているのがプレカリアートであり、大量の失業者と社会不適合者がそれに隣接している。プレカリアートの置かれている状況は、「社会的所得」の概念によって説明される。社会的所得には、自主的な生産、労働による貨幣賃金、家族や地域コミュニティからの支援、企業福祉、国家福祉、貯蓄や投資による利益という六つの要素が存在する。かつての労働者階級には享受されていた社会的所得を剥奪されたプレカリアートは、職業的アイデンティティや上昇移動の見通しを欠いた不安定な生活を強いられるという、「プレカリア化」の途上にある。

第2章では、「なぜプレカリアートが成長しているのか」という問題が検討される。プレカリアートの成長の主要な原因は、あらゆるものを商品化するグローバル化に条件づけられた、柔軟な労働関係の追求である。「標準的雇用関係」を守るために、政労使合意を通じて雇用の非正規化が容認されたことで、労働市場の二重構造と、労働組合に対するルサンチマンがもたらされた。1960年代に先進国の労働市場に参入した人びとは退職までに概して4人の雇用主に仕えたが、現代の労働者は30歳に達するまでに9人の雇用主を経

験する。企業福祉の縮減によって労働力の再商品化が進行するなかで、企業は景気後退を口実に、労働力のプレカリアートへの転換と、オフショアリングやアウトソーシングを含めたリストラを強行してきた。資力調査つきの給付に起因する失業の畏や貧困の畏に加えて、給付申請や就職活動や教育訓練に伴う取引費用は「プレカリティの畏」を生み出している。

第3章では、「だれがプレカリアートになるのか」という問題が考察される。そこでは、労働市場の女性化、高齢者の再商品化、障害の認定の増加、犯罪の摘発の増加という四つの変化が指摘される。労働市場における女性の役割の拡大とプレカリアートの成長はパレレルに進行しており、高学歴化につれて育児と仕事と介護の「三重負担」に直面する「女性稼得者」が増加する一方で、金融危機は「男性不況」の様相を呈する。アーバン・ノマドの若者は、みずからの学位や資格に不釣り合いな仕事を強いられることで欲求不満に陥る。またキャリア形成や長期の雇用保障を期待しない高齢者が働くことは、年金危機と労働力不足の対策となる一方で、場合によっては深刻な世代間対立を惹起する。高齢化とともに増加する障害者を、給付削減のために「雇用可能」にしようとする試みがなされ、刑務所の増加と民営化に伴って、囚人労働が非常に安価な労働力の活用として推進される。

第4章では、「移民は犠牲者か、悪者か、あるいは英雄か」という問いが提起される。現代の人の移動には、不法移民の増加、定住しない「還流」の増加、移民の女性化、留学の増加、多国籍企業の配置転換の大規模化、難民と庇護申請者の増加、「環境難民」の出現という七つの特徴がある。シティズンシップの権利のシステムは、一切の権利を喪失した庇護申請者、正規の労働や社会保障の権利を持たない不法移民、在留資格に応じて権利が制限される一時滞在者といった順序で、完全な市民として承認されていないデニズンのスペクトルを構成する。移民にしか受け入れられない水準まで賃金が引き下げられるにつれて、かつては歓迎された移民の悪魔化と再周辺化が進行する。労働条件の下方圧力の亢進に加えて、移民はしばしば労働組合の結成や加入を許可されず、移動の自由を制限され、不払いや即時解雇の不安にさらされて、彼らを守るはずの行政職員からも侮辱を受ける。

第5章は、「労働の区分と時間の圧搾」を論じている。人間の生活は、生産活動、再生産活動、遊び、余暇という要素で構成されている。生産活動が交換価値を有する労働であるのに対して、再生産活動はそれ自体の使用価値のためになされる。現代社会の特徴は生産活動への過度の圧力であり、リスク管理のために複数の仕事を掛け持ちすることへの関心が高まっている。就職活動や給付申請や教育訓練といった「労働のための労働」や、資産運用やケア労働のような「再生産のための労働」が増大した結果、能動的な余暇の活動に参加する気力や体力が摩耗した人びとは、受動的な遊びにふけるよりほかない。職場と

家庭の境界がゆらぎ、マルチタスキングや情報通信技術が思考を断片化する。文化のおよび芸術的な活動、市民としての公的生活への参加、時間に対するコントロールという三つの側面において圧搾が強まり、たえず仕事に備える人びとの「余暇の貧困」が深刻化する。

第6章は「地獄の政治」を、プレカリアートが抵抗すべきものとして批判している。ネオダーウィニズムに基づく新自由主義国家は、自由競争と自己責任を崇拝し、あらゆる集合的なものを嫌悪する。従順な精神と身体を作り出すパノプティコンの装置が、企業や組織の採用、規律、昇進、解雇の戦略に組み込まれ、行動経済学のお墨付きを得たりバタリアン・パターナリズムは、人びとが「社会」にとって「よりよい」選択をするように仕向ける。ワークフェアとコンディショナリティの徹底によって、失業者はわずかな給付を得るために、提示された仕事に必ず就かねばならなくなる。経済成長と雇用のほかに語るものがなく、不平等の拡大に対応できない中道左派政党が敗北し、人びとの不安に訴える極右政党が台頭している。新自由主義を支える功利主義は、制裁と誘導と監視を通じて少数派をみずからの規範に従わせ、「最大多数の最大幸福」のために多数派の専制を展開する。

第7章は「楽園の政治」を、プレカリアートが要求すべきものとして構想している。労働者協同組合や非正規労働者の組合は、プレカリアートの利害を代表し、企業や政府やほかの階級と継続的に交渉する団体となりうる。経済保障、時間、価値ある空間、知識、金融資本という五つの主要な資産の再分配においては、ベーシック・インカム（BI）の貢献が期待される。税と給付のシステムの統合は、資本と労働に対する補助金の段階的な廃止と、金融資本のハイ・リターン再分配という二つの改革によって補完される。BIの財源としては、政府系ファンドやトービン税や環境税を利用することが考えられる。人びとはBIによって時間に対するコントロールを回復し、大量の情報に直面しても合理的な意思決定が可能になる。プレカリアートは、環境保護に重きを置く「緑の階級」として生活のスローダウンを実践し、豊かな公共空間の再生を通じて熟議民主主義を実現せねばならない。

### 3 考察と課題

本書は数多くの興味深い統計を参照しつつ、現代の先進国における主流の社会政策を疑問に付し、大胆な改革を提案している。他方で、第2章においてはグローバル市場経済の発展が不可逆であるとみなされ、保護主義や移民排斥は明確に退けられている。そして、柔軟な労働関係はグローバルな労働過程の必然であり、変化を反転させるのではなく、変化を許容できるものにするために何が必要なのかを明らかにすることが重要だと指摘され

ており、非常にバランスの取れた議論が展開されている。パターンリズムに抗する本書が一貫してめざしているのは自由選択社会の実現であり、新自由主義が想定するような、生産に従属した自由ではない、リアルな自由の擁護である。こうしたきわめて魅力的な立論にもかかわらず、本書には一定の限界も存在し、引き続き検討すべき課題が残されている。ここでは、本書の根幹にかかわる三つの論点を、本稿の関心に沿って批判的に考察する。

第一に、プレカリアート論と従来の社会学との接合という課題が存在する。プレカリアート論が取り上げようとしている現実を、社会学の既存の語彙で表現しようとする、まず想起されるのが「社会的排除」ということばである。貧困の概念が経済的資源の不足に焦点を当てるのに対して、社会的排除の概念は社会関係の不足を把握しようとする。また社会的排除の研究は社会参加の欠如における複合的な要因を強調し、その相互作用が社会からの排除に結びつく際の動的な過程に注目する（岩田 2008）。こうした社会的排除が進行する原因としては、しばしばグローバル化と経済のサービス化という社会変動が挙げられるが、これらはまさに本書がプレカリアートの拡大の条件として論じたものであった。さらに、社会的排除の最も簡潔な定義の一つは「シティズンシップの喪失」であるが、これも本書がデニズンの増大という観点からプレカリアートを特徴づけたことに対応している。

このように、プレカリアートの概念は社会的排除の概念と深い関連がある。すなわち、グローバル化と経済のサービス化を通じて個人の生活が不安定性を増す過程が社会的排除と呼ばれ、そうした社会からの排除に直面している個人の集団がプレカリアートと呼ばれているのである。他方で、プレカリアート論は社会的排除論に対する批判にもなりうる。政策の用語として登場した社会的排除の概念は、排除を行う主体の問題を理論的には視野に入れているものの、主要な関心は労働参加を軸とした社会的包摂に向けられており、排除の主体を告発したり、排除の客体による集合行為を論じたりするには必ずしも有効でない。しかしプレカリアートの概念を用いれば、みずからの不利な状況をめぐって異議申し立てを行う具体的な行為主体を指定することが可能になり、労働主義に傾斜している現実の社会的包摂を批判しつつ、政治的な変革の可能性を議論の射程に収めることができる。

第二に、プレカリアートの定義をめぐる問題が未解決である。本書の階級図式は現代の労働市場の構図をうまく描出しているが、その枠組みを導出する手続きは明らかでない。七つの階級の種差的特徴が十分に示されておらず、失業者や社会不適合者をプレカリアートに次ぐ階級として指定することの妥当性も疑わしい。第1章では既存の労働統計や経済統計が、プレカリアートの総計の算出が可能であるようにはできていないという釈明がなされているが、なんらかの方法で操作的に定義することができなければ、実証研究を通じ

てプレカリアートの概念の有効性を評価する可能性が閉ざされてしまう。たとえば現代のマルクス主義階級理論においては、資本家階級、新中間階級、労働者階級、旧中間階級という四つの階級が定義され、この図式のもとで多くの計量分析が蓄積されている（橋本2006）。プレカリアート論の発展のためにも、理論的な根拠のある階級図式の彫琢が望まれる。

また福祉国家の形成を説明する階級連合理論によると、労働者の利害を代表する社会民主主義政党が政権を獲得するためには、単独で有権者の過半数を占めることのできない労働者階級が、農民やホワイトカラーといったほかの階級との政治的な同盟を実現する必要があった（Esping-Andersen 1990=2001）。プレカリアートの規模は成年人口の4分の1程度にとどまるという第1章の記述に従うならば、こうした階級連合はプレカリアートの権力資源動員にとっても不可欠だといえる。他方で前述の階級理論においては、一般的信頼を喪失しつつある労働者階級やフリーター・無業者層が新たな階級闘争の主体となる可能性は低いと見積もられており、むしろ政治に関する意識が高い新中間階級による変革が期待されている。熟議民主主義を唱導する本書は、エリートやサラリアートのみならず、そもそもプレカリアート自身も熟議のテーブルに着く保証はないのではないか、という批判に向き合う必要がある。

第三に、スタンディングのライフワークの一つであるBIの位置づけを再確認する必要がある。第2章において、在職給付や勤労所得税額控除（EITC）のような、失業の毘を伴う労働への補助金は実際には資本への補助金であり、結果的に雇用主による賃下げを助長するとして批判される。また第7章においては企業福祉の廃止が主張され、バタナリスティックなパウチャーや現物給付、および貧困の毘をもたらす負の所得税（NIT）も否定される。市場をゆがめる補助金を排除することで「完全な労働力の商品化」をめざすという本書の立論を支えているのは市場に対する信頼であり、一連の制度に取って代わるBIが自由と経済保障を両立させると考えられている。しかしBIはあくまでも所得保障にかかわる構想であり、それと組み合わせられるべき社会サービスのあり方については別途の検討が必要である。多様なニーズに対応する、柔軟な社会サービスの重要性は軽視されてはならない。

また福祉国家の活動には、所得保障と社会サービスを包含する社会給付に加えて、社会規制という側面が存在する（武川 2007）。本書が提唱する「楽園の政治」は規制のあり方を積極的に打ち出しておらず、明示的に言及しているのは、教育の商品化に対する規制、およびプライバシーを侵害する監視と誘導に対する規制についてのみである。解雇規制、労働時間規制、最低賃金規制といった雇用者の生命にかかわる規制の問題が、BIによっ

て雲散霧消するとは考えにくい。規制撤廃に対する従来の批判は、何をどの程度まで規制すべきかについての具体的な提案をしばしば欠いていたが、BIを導入した場合にこうした規制がどのように設定されるのかについての検討が必要である。裏を返せば、BIに瑕疵があるとしても、ほかの給付や規制によってそれを補完する可能性は開かれている。少なくとも、BIのもたらす便益に注目するあまり、思考停止に陥ってしまうことは避けねばならない。

#### 4 おわりに

本書はポスト金融危機の時代の社会政策を構想するうえできわめて示唆に富む著作であるが、ここでは民主主義にかかわる論点を確認することで、本書の総括を試みる。本書の副題には「新しい危険な階級」という、やや誤解を招くおそれのある表現が採用されているが、その「危険」を呼び起こすものとしてポピュリスト・ネオファシズムという政治勢力が挙げられている。そして第6章では、社会民主主義が後退するなかで柔軟な労働市場を指向し、人びとの不安を放置する現代の政策こそが、ポピュリズムの台頭の呼び水になったと指摘されている。

こうした主張は、熟議の限界を強調する闘技民主主義の理論家とも現実認識を共有している。闘技の観点に立つと、右翼ポピュリズムが先進国で支持を獲得している理由は、新自由主義のヘゲモニーのもとで社会民主主義が中道へ移動したことによって、左派と右派の対立が不明瞭になったという政治状況に求められる（Mouffe 2005=2008）。したがってポピュリズムの出現は、民主主義の機能不全の原因ではなく、結果にすぎない。プレカリアートの擁護者は、ポピュリズムを批判するまえに、ポピュリズムを誘い込んだ福祉政治の布置連関を問題にする必要がある。

また本書は見過ごしているが、無条件の所得保障としてのBIがポピュリズムに結びつく可能性は否定できない。BIの導入と引き換えに入国管理を強化するという、「楽園の政治」のつまみ食いのような戦略も考えられる。先進国の資本主義が、ドイツのステークホルダー・モデルではなくアングロサクソン諸国の株主モデルへと収斂しているとみなす本書の立場からすると、ポピュリズムの扇動からプレカリアートを防衛するためにも、BIを軸として素描された「楽園の政治」を、現代の政治に対するオルタナティブへと鍛え上げることが急務だといえる。

いずれにせよ政治家や研究者は、人びとの雇用が奪われている現実を放置したまま移民に対する敵意を道徳的に批判したり、人権の普遍性を説いたりしても、結局はみずから

に対する支持を失ってしまう。左派の再興は、プレカリアートの利害を代表し、彼らの信頼を得る存在へと、内的な変革を遂げることができるかどうかにかかっているといえる。そしてグローバル化という避けがたい現実に向き合いつつ、政治は何において対立するのかという根源的な問いに取り組む必要がある。プレカリアートは、新たな対立軸の設定を要求しているのである。

## 参考文献

- Esping-Andersen, Gøsta, 1990, *The Three Worlds of Welfare Capitalism*, Cambridge: Polity. (= 2001, 岡沢憲美・宮本太郎監訳『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房.)
- 橋本健二, 2006, 『階級社会——現代日本の格差を問う』講談社.
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣.
- Mouffe, Chantal, 2005, *On the Political*, London: Routledge. (= 2008, 酒井隆史監訳『政治的なものについて——闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店.)
- 武川正吾, 2007, 『連帯と承認——グローバル化と個人化のなかの福祉国家』東京大学出版会.
- 渡邊太, 2012, 『愛とユーモアの社会運動論——末期資本主義を生きるために』北大路書房.

(いけだ ゆう・修士課程)